

221) ゼロからの旅立ち

いくつ季節をあなたとふたり この川沿いの街で過ごした
今は思い出 記憶の中に キャンドルみたいに灯っているだけ
うしろ髪ひかれつつ この街をあとにする
あの橋を渡ったら もう二度と帰らない

あなたの前で子供みたいに 泣けなかったの年上だから
強く抱いてとせがんでいたら この哀しみはなかったでしょう
人ごみを抜けるたび この街は過去になり
信号を渡るたび この街が遠ざかる

この寂しさが憎らしいから わたしの過去を蹴飛ばしたくて
橋の上から部屋の合鍵^{あいかぎ} 遠くに投げた もう帰れない
捨てるもの残すもの わたしには何もない
ゼロからの旅立ちに 川風が心地いい

深みに落ちた鍵の波紋は 向こう岸まで広がってゆき
やがてわたしの心のように 青空映す鏡になった
ひとりでも大丈夫 あてもなくバスに乗り
^{あした}明日から新しい 倅せを探すから

深みに落ちた鍵のごとくに 恋も深みにはまったけれど
人ごみを抜けるたび この街は過去になり
信号を渡るたび 思い出に変わってく
ひとりでも大丈夫 倅せを探すから